

ここに記した方のほとんどは今ではもう亡くなっている。私はこの方たちに出会えたことを心から感謝している。

ここに記せなかった方たちとの出会いにも感謝している。それはこの方々から、人が生きるということの意味を気付かされ、教えてもらったからだ。

一人ひとりの生き方は何と尊厳に満ちたものだろう、逆に私のこれまでの生き方の自己中心性に気付かされ、生きるために人と出会うことの大切さを、私は高齢者と接する介護で学ぶことができた。

私は病気を抱えながらさまざまな事情にとらわれて困難に陥っている人たちの相談援助をやるうと、50歳を過ぎてから病院を退職し、カウンセラーをめざして勉強することにした。

働きながらの学習なので、ヘルパーの資格を取り、認知症高齢者の介護職場で働きだした。そこで直面した介護の現場に戸惑いもしたが、それよりもなにより私は人が生きる意味について高齢者から新たな気づきをいただいた。

私の考えていた以上に、この世界は奥行きが深く、苦難に耐え、激動の昭和を生きてきた高齢者の人生に接し、教えられることが多かった。

私は本格的に介護労働に関わろうと決意し、毎日すべての入所者とコミュニケーションを持ち、一日一回は笑ってもらおうと努力した。

人生の先輩である高齢者と心を通わせるために、詩や短編小説や生活記録の朗読を始めたが、これが大いに受けて、親密な交流をすることができた。認知症高齢者は、記憶や判断のすべてが認知できないわけではない。人生の出来事を鮮明に記憶しており、それを伝えようとする意思を明確に持っている。

十数年にわたる高齢者介護の体験は、私の生き方に大きな影響を与えた。

もともとカウンセラーをめざすための生活資金稼ぎという軽い気持ちで入った介護労働だったが、出会った高齢者から鮮烈な人生体験を聞かされ、学ぶことが多かった。私は介護の世界にのめり込み、カウンセラーの道は挫折したが、介護で働いたことに全く悔いはない。

長らく社会の一員として歴史の流れを作ってきた高齢者に、「健康で文化的な最低限度の生活」、すなわち基本的人権を無差別平等に保障することが、社会に求められている。

戦後ベビーブーム世代が75歳を迎えようとしている今、高齢者介護は国の喫緊の課題となっている。介護の現場で働いてきた私から見れば、公的制度としての介護保険を豊かにし、誰でも安心して利用でき、人生の終末期を住み慣れた地域で暮らせるように改善を図るべきだし、何よりも人権のない手である介護労働者の評価を高め、賃金をはじめとして労働条件を大きく改善することが必要だ。

そのためには世論を動かすことが必要だ。

私が気になっているのは、介護に関連する本は数多く出されてはいるが、介護のスキルや理念、法的関連のものが多いことだ。介護労働の厳しさと同時に、魅力や喜びを現場から発信し、介護労働者を励ますものがあまりにも少ないのではないか。本書の出版の動機は、その気がかりでもあった。

私の体験記録がどれほどの力を持っているかは自信はないが、本書が少しでも役に立つならば、と思っている。

2019年9月17日

黒梅 明